

# ブラタモリ風「常陸太田鯨が丘」

中央技術㈱

岡崎 克美



## 1. はじめに

最近、テレビで各地域を紹介する番組が増えてきたように思います。昔は「自然・街・人」を写真やVTRで、ナレーションにより紹介されていましたが、今は案内者により特にバスに乗ったり、電車に乗ったり、歩いたりテーマも出演者もいろいろな分野の方々に案内されます。私は元々各地域の地誌が好きで、そういったものが放映されると夢中で見ております。そのような番組を見る時は、手元に地図帳や観光案内パンフなどを広げて確認し、自分もその場にいるつもりになって見えています。直近では「ブラタモリ」や「鶴瓶の家族に乾杯」で水戸市内が紹介されました。懇意にしている先生や近所の知り合いなど登場して、見ていて楽しいものです。特に「ブラタモリ」は本格的な先生方が説明されていますので、地形・地質構造的なものから歴史の流れを説明し、自然と人間の関わりが分かりやすく、正確で大変有意義です。昔から邑・村・町・街・城下町・都市など歴史的に人が集まって集団生活をするには、その地点が、安全・安心な場所で、水の便、交通の便が良い等の条件が揃っている場所を選定あるいは改良してきていると考えております。武力で治められた時代には、砦や館・城を築くに当たって、戦いに有利な条件が第一で、さらに民の生活のための各種条件を検討して場所と縄張り、町割りを決めたのです。地形地質を理解して計画されると思っています。

こんなことを考えているときに、原稿作成の依頼が来まして、何を書こうかと考えた時、以前社内報に掲載した地域の話をもとに「ブラタモリ」風にまとめ直すことにしました。

## 2. 常陸太田の「くじら」のはなし

常陸太田市の旧市街地の台地は、現在「鯨が丘」と呼ばれており、「くじら・・・」はいろいろなところに使われています。「くじら」の語源を常陸太田市史から調べてみました。(出典：1))

■「常陸風土記」の「久慈郡(くじのこほり)」の項には、『東は大海(おほうみ)、南と西は那賀郡、北は多可郡と陸奥国の堺の岳(やま)となる。古老曰(ふるおきな)のいへらく、郡衙(ぐんが、常陸太田市大里あたり)より南(みなみ)のかた(中野あたり)に小さな丘がある。形が鯨鯢(くじら)に似ている。倭武天皇(やまとたける)のすめらみこと)は、因りて久慈(くじ)と名付けた。』とあります。また、「くじ」という言葉については、次のような記述もあります。

■「塵袋(ちりぶくろ)第六」の「久慈理(くじり)岳」の説明には、『常陸國ニ久慈理ノ岳ト云ウヲカアリ。其ノヲカノスガタ、鯢鯨(くじら)ニニタルユエニカク云ヘリト云々。俗語(く)にのひとのことば)ニ鯨を謂テ久慈理ト為スト云ヘリ。』

■鯨が丘商店会の案内板には、鯨が岡(丘)の由来として「太田盛衰記」より引用とすることで、『景行天皇の時代(4世紀頃)日本武尊が東夷征伐のためにこの地を巡った際、丘陵の起伏があたかも鯨が洋上に浮遊している状に似ているので「久自」と名付けた。(※「久自」変じて「久慈」となり、「鯨が岡」となった。俗語に「鯨」を「久慈理」と伝う。とある。)]と説明しています。

このように、経緯はよくわかりませんが、この近くのあちこちの高台(段丘や丘陵)のスカイラインが海に浮かぶ「くじら」を連想して「くじらが丘」と言っているようです。私には佐竹地区の峰山の方が「くじら」に似ていると思います。どこがというわけではなく、どこでもありかなと、こう思うようになってきました。今では常陸太田の旧市街のある高台が「鯨が丘」と呼ばれていることが多いよう

です。2、3年前に歴史学の著名な先生にこの辺の事情をお聞きしましたが、明快な答えは得られませんでした。茨城県立太田第一高校の校歌にも歌われ、太田の商店会でも他でも「くじらがおか」と言われています。「くじら」を冠して色々に商品化されています。厳密なことを言っても、物事なんでも時間の経過と共に変わっていくのだから、それはそれ、これはこれで、仕方がないのかと思うことにしました。

ちなみに、太田一高の校歌は、旧制太田中学校時代の1915年(大正4年)9月に制定され、作詞者は当時東京音楽学校教授で、瀧廉太郎の作曲「花」を発表していた武鳥羽衣であり、作曲者は当時学習院助教授の小松耕輔です。2番の頭に「岡の名に持つ長鯨の潮をいぶく勇あらば・・・」と歌われています。

## 3. 常陸太田旧市街地について

常陸太田の地形・地質の話としては、ここは関東平野の北の端で、福島から棚倉断層帯が走っていること、東側の阿武隈山地には変成岩が広く分布していること、特に最近、日本最古の5億年前の地層が発見されたということが大きな特徴となっております。(図-3参照)。

これらの話やまちの歴史的な話は次回に譲ることにして、太田の鯨が丘の話に戻します。

県北の中心であった常陸太田市街地(図-1~12参照)の高台は、東を里川、西は源氏川に挟まれた谷口の河岸段丘です。両河川の流下土砂を堆積物とする台地を形成して、その後東西両側を両河川に削られ断崖となりました(図-5参照)。周辺に分布する同じような高台は、図-7治水地形分類図のオレンジ色の地域がそれに当たります。太田の旧市街地は周辺の地域からは必ず坂を上り下りしなければなりません。東西方向の移動はまさに山越えか遠回りをするかでしたが、最近完成した「鯨が丘トンネル」や「舞鶴橋」により格段の便利さを楽しんでいます。

段丘地形は、一般的には基盤となる岩盤(水戸より県北海岸の多くは泥岩)上に、川や海由来の礫、砂、シルト、粘土などを何層にも堆積し、その上に関東ロームが積り、そして表土を載せています。高台の表面に降った雨水は表流水と地下への浸透水となり、水を浸透させない不透水層(粘土層や基盤岩など)の上から、崖に湧水となって地表に出てきます。人ばかりでなく動植物も恩恵を受けて来ました。

図-7は、常陸太田の市街地を南側から見ており、赤い部分が密集地となっています。図-7の3D地形は、治水地形分類図から黄土色は丘陵や山地、オレンジ色の横縞模様は台地、クリーム色の沖積地の、高さのイメージを簡易的に3D立体に見えるよう加工しております。常陸太田の高台は幅が狭く細長の馬の背のような台地です。



図-1 常陸太田中心部及び周辺位置図(国土地理院2.5万分の1地形図から)



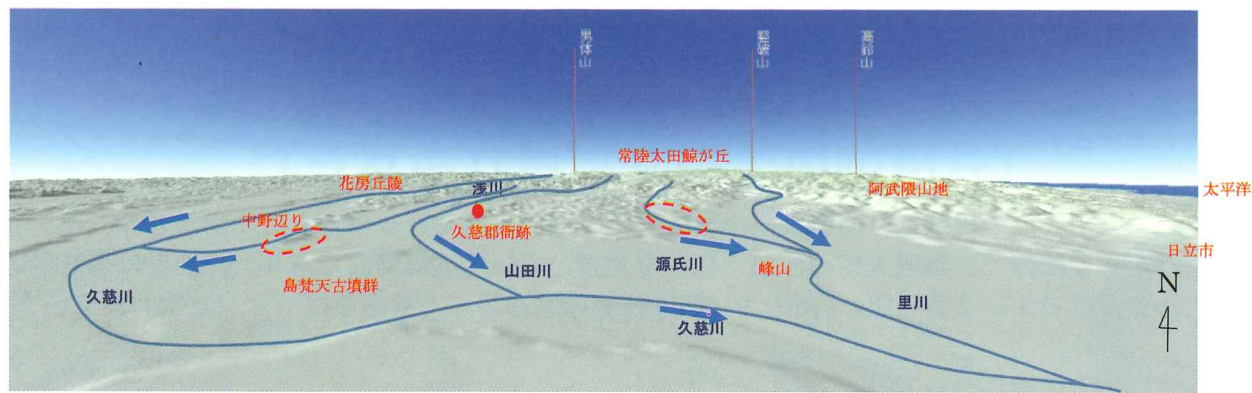


図-2 図-1内※印上空から俯瞰した常陸太田市街地と郡衙跡 (カシミール3Dにより作図)



写真-1 久慈郡衙付近から見える現在の中野辺りの景観 (風土記の世界では鯨に見えた)

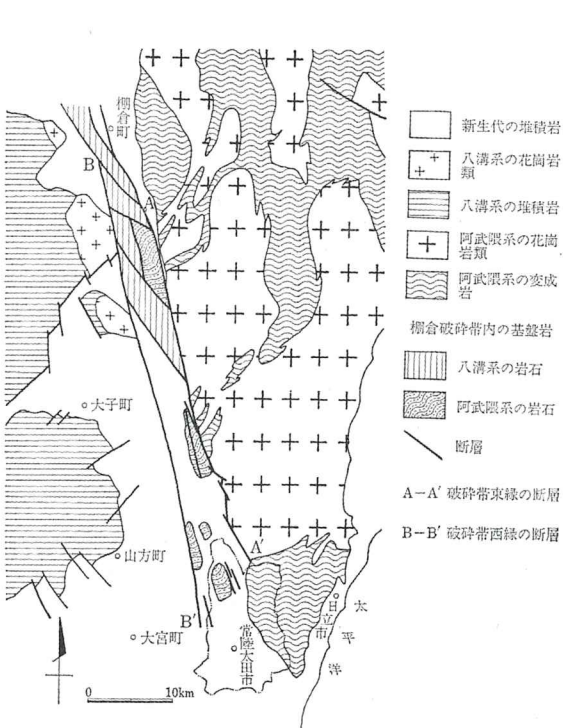


図-3 常陸太田から棚倉にかけての地質図 (出典：1)

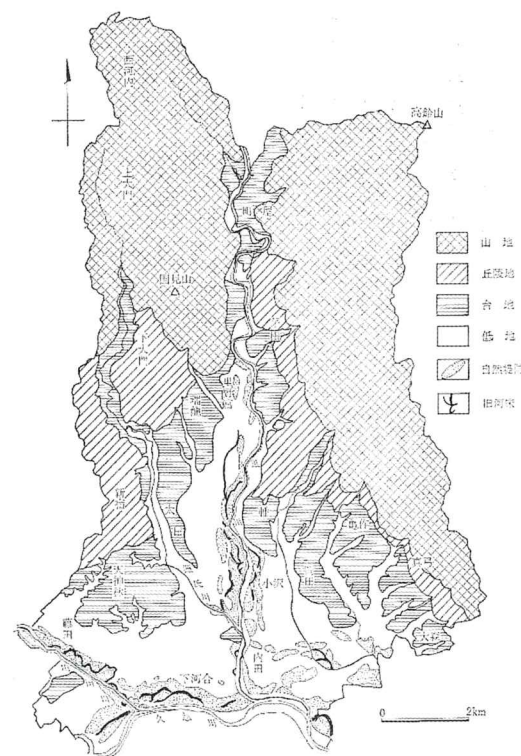


図-4 常陸太田の地形分類図 (出典：1)

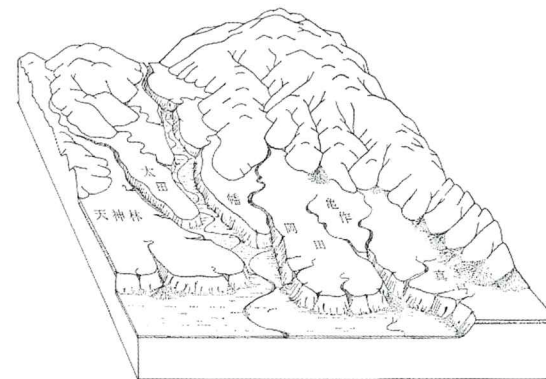


図-5 下末吉海進後海面低下時代の地形想定図 (出典：1)



図-6 常陸太田市街地の凹凸状況 (カシミール3Dにより作図)



図-7 常陸太田付近の治水地形分類図から3D化図 (出典：2)

この台地の地形・地質を見るために図-8市街図から、図-9縦断面図と図-10、11横断面図を図化した。

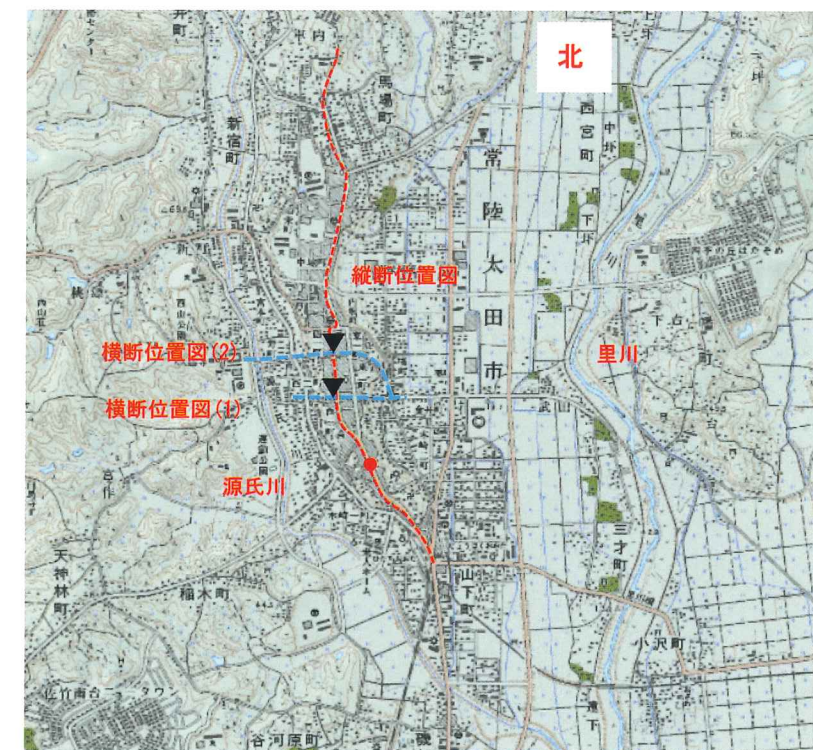


図-8 常陸太田市街地図



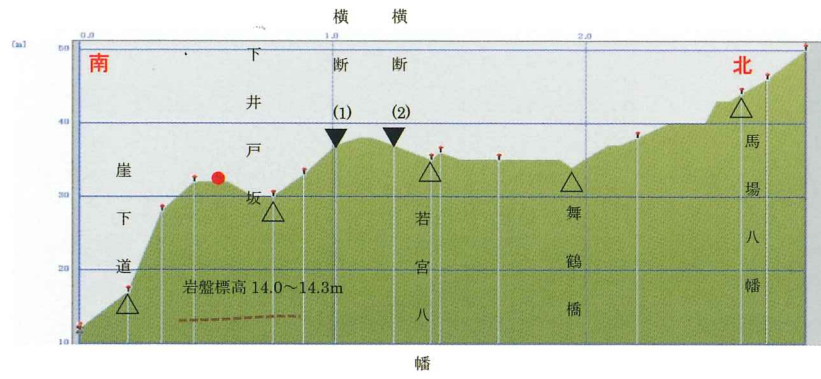


図-9 常陸太田市街地の縦断面図

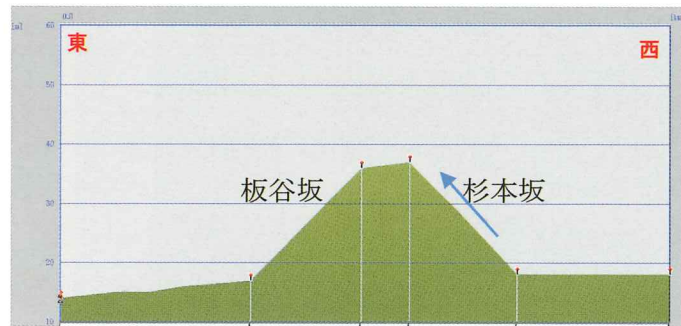


図-10 常陸太田市街地の横断面図 (1)

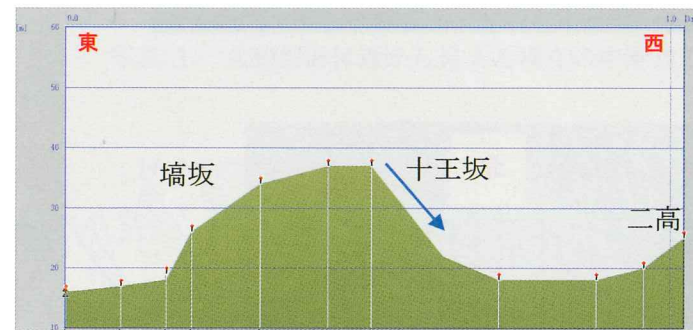


図-11 常陸太田市街地の横断面図 (2)

標尺	層高	深度	柱状図	土質区分	色調
(m)	(m)	(m)	(m)		
					地表面 標高 31.93m
1	30.53	1.30	粘土 (FI)	褐	
2	29.43	1.20	ローム (Lm)	褐	ローム面 標高 29.43m
3	29.03	0.40	砂礫 (GS)	黄褐	
4			粘土質細砂 (FSC)	淡黄褐	
5	28.73	2.30	中砂 (MS)	淡黄褐	
6			中砂 (MS)	淡黄褐	
7	24.83	1.80	細砂 (FS)	淡黄褐	
8	24.23	0.70	中砂 (MS)	淡黄褐	
9	23.03	1.20	砂質シルト (MS)	褐	
10	22.13	0.90	細砂 (FS)	暗褐	
11	21.53	0.60	砂質シルト (MS)	暗褐	
12			暗灰	暗灰	
13	18.43	3.10	砂礫 (GS)	淡黄褐	
14			粘土質じり砂礫 (GS-C)	淡黄褐	
15	16.43	2.00	15.50	淡黄褐	
16			17.90	暗灰	
17	14.03	2.40	14.03	暗灰	岩盤 標高 14.03m
18			17.90	暗灰	
19				暗灰	
20				暗灰	
21				暗灰	
22				暗灰	

図-12 鯨ヶ丘トンネル付近の柱状図 (ボーリング名080103035002 出典: 3)

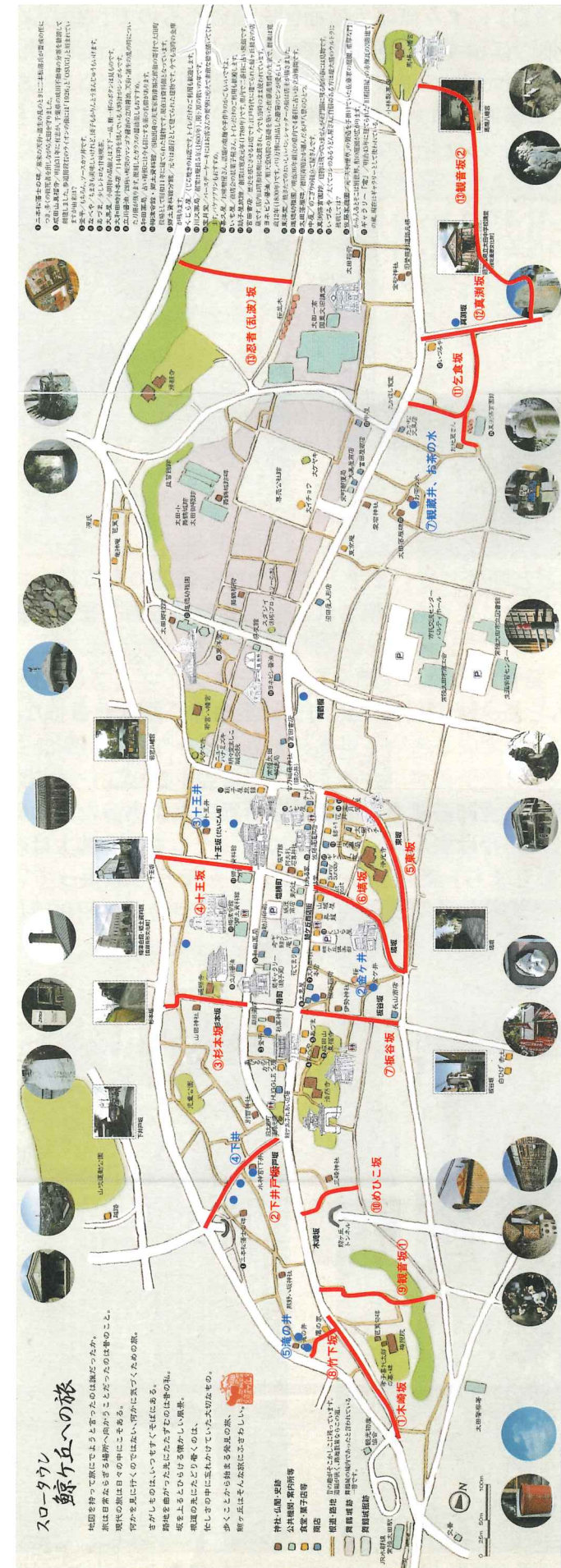


図-13 常陸太田市街地案内図 (鯨ヶ丘ウォーキングマップ (出典: 4) に追加記入)



市販ソフトの「カシミール3D」により概略の断面図を描いたもので、おおよその形状が分かります。図-9 縦断面図は図-8の市街地図に示す縦断面位置で、北の山から続く台地の形状です。次に図-10、11の横断面図は縦断面図に概ねの位置を示しています。図-10の横断面図(1)は、車は上りのみの杉本坂から、車両不可の階段の板谷坂に至る横断面図で、図-11横断面図(2)は、太田二高から十王坂(車両は下りのみ)、塙坂を通る横断面図です。どの坂も上り下りには、歩いても車でも結構大変な道です。

現在は、「鯨が丘トンネル」により、常陸太田-瓜連-石塚-笠間に続く道路として、東側の棚倉街道のバイパスから西側の国土交通省久慈川下流出張所前まで一直線に繋がっています。東西の連絡がスムーズになりました。そのトンネル付近のボーリング調査結果を図-12柱状図に示しました(近傍の調査結果からも基盤の標高は14.03、14.09、14.28、14.29mとなっており、概ね14.0~14.3m)。ここでは、表層のローム層は地表から2.5m程度と薄く、泥岩から成る基盤の上に礫層、そして粘土質からシルト質、砂質の堆積層から構成されています。まさしく、里川と源氏川の流下土砂による段丘です。天から降った雨が表層を流れ、地下に浸透して不透水層の上部から湧出してきます。これが湧水となり飲料水や醸造水等に利用されてきました。台地上にも井戸は沢山ありますが、きっと深い井戸と思われると思います。これらの水位標高を調査していませんので今後の課題とします。

### 3. 太田七坂(ななさか)と太田七井(しちせい)

これらの坂と湧水について、それぞれに7つ選び、「太田七坂(おおたななさか)」や「太田七井(おおたしちせい、なない)」などと呼ばれています。この他にも名前のある坂もあります。また実際には涸れて無くなった湧水や井戸、他に現在も利用されている井戸等もあります。冊子になったものやネット情報が沢山あります。

今回、常陸太田市商工会で発行している「鯨ヶ丘ウォーキングマップ」(出典:4)に、この「太田七坂」と「太田七井」を表示して、図-13常陸太田市街地案内図を作成しました。

#### 3.1 太田七坂(おおたななさか)

昔は役所、金融機関、商店等生活に必要なものは全部台地の上にあったため、市民は必ず坂を上り下りしなければなりません。今は主な商店が平地に移ってしまい台地上は寂しくなりました。地元東町(ひがしまち)・西町(にしまち)商店会が活気を取り戻そうと頑張っています。常陸太田駅を発し、歩きながら街の様子と「太田七坂」をご紹介します。江戸時代、昭和時代と現在が混在した説明になっています。

##### (1) 木崎坂(きざきざか)

まず、JR常陸太田駅から「鯨が丘」の市街地に向かう最初の坂が「木崎坂」です。比較的緩やかな坂で、名前の由来は、坂の頂上付近が木崎山と呼ばれていたからとも、江戸時代に番所の木戸があり「木戸の先」からとも言われています。



写真-2 大正時代の太田駅近くの木崎坂 出典:5)



写真-3 現在の太田駅近くの木崎坂

##### (2) 下井戸坂(しもいどざか)

木崎町を過ぎ少し低い箇所が、車両は下りのみ一方通行の「下井戸坂」の頂上です。常陸太田から笠間を結ぶ笠間街道の出発点になります。名前の由来は、「太田七井」の一つ下井水神宮からきています。現在は所々に空き地が目立ちます。



写真-4 昭和50年代の下井戸坂 出典:4)



写真-5 現在の下井戸坂

##### (3) 杉本坂(すぎもとざか)

「鯨が丘ふれあい広場」から西町通りを北上して医院や歯科医院を過ぎ、建設会社の先に、西側から上りのみ一方通行で「七坂」の中で一番急な「杉本坂」があります。車で上るには少し怖いし、徒歩で上るのも覚悟の要る坂と思っています。途中で止まったら坂道発進どころではありません。一気に上り切らないと大変危険です。名前の由来は、坂の途中にある遍照寺(呑龍 どんりゅうさん)の山名の「杉本山」からと言われております。

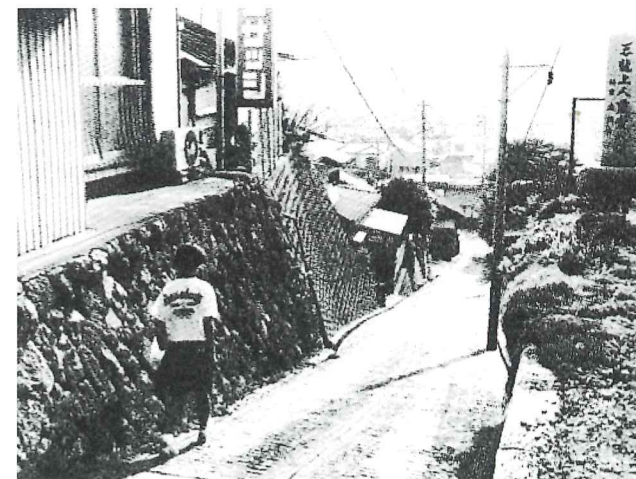


写真-6 昭和50年代の杉本坂 出典:4)



写真-7 現在の杉本坂



#### (4) 十王坂 (じゅうおうざか)

梅津会館 (旧市役所)、旧銀行跡の郷土資料館脇に急な坂があります。下りのみ一方通行の「十王坂」が正式名称ですが、昔から地元の人はその先に女子高の太田二高があることにより、愛称として「大根坂 (だいこんざか)」とも呼ばれています。



写真-8 昭和50年代の十王坂 出典：4)



写真-9 現在の十王坂

#### (5) 東坂 (あづまざか)

東町通りの北端から、そのまま崖に沿って東へ下りていく坂が「東坂」です。この坂を下りると、次の「塙坂」と合流し、さらに「板谷坂」の上り口となります。

「七坂」の中では一番新しい坂です。名前の由来はよく分かりませんが、東町の坂だから東坂と呼ばれたのではないかとされています。私が子供の頃、太田から阿武隈の麓あたりの親戚の家に行くバスがこの坂を下りて行きましたが、崖際だったので怖かったことを覚えています。

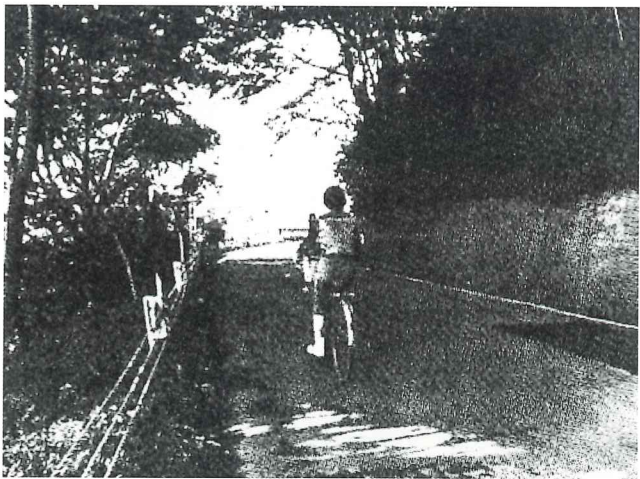


写真-10 昭和50年代の東坂 出典：4)



写真-11 現在の東坂

#### (6) 塙坂 (はなわざか)

東の坂「塙坂」から西へ「塩横町 (しおよこちょう)」を通り、西町通りを越えて太田二高への(4)十王坂に繋がるルートは、路面にカラー石畳舗装がされています。ここは、昔の「塩の道」であり、塩等の海産物と山からの産物の通り道としてにぎわっていたそうです。四つ辻には「待合広場」があり、休憩地点となっております。古くからの店構えの料亭、時計・宝石店や塩町館等があります。なお、塙坂は両方向通行可です。



写真-12 昭和50年代の塙坂 出典：4)



写真-13 現在の塙坂

#### (7) 板谷坂 (ばんやざか)

階段の「板谷坂」から東町通り・西町通りを横切り、上りのみ一方通行の「杉本坂」が一直線に並んでいます。「板谷坂」は、私の最も好きなポイントで、眺望が開けます。上の方ほど急になっています。昔は坂の頂上からの阿武隈山系 (真弓山) と水田地帯の眺めは素晴らしく、「眉美千石 (まゆみせんごく)」と呼ばれていたそうです。名前の由来は、かつて佐竹氏の時代に番屋があったからと聞いています。下りて行くと十字路で「東坂」、「塙坂」からの道と交差します。現在は、直進すると、移転した市役所を過ぎ里川を渡って真弓地区に至ります。

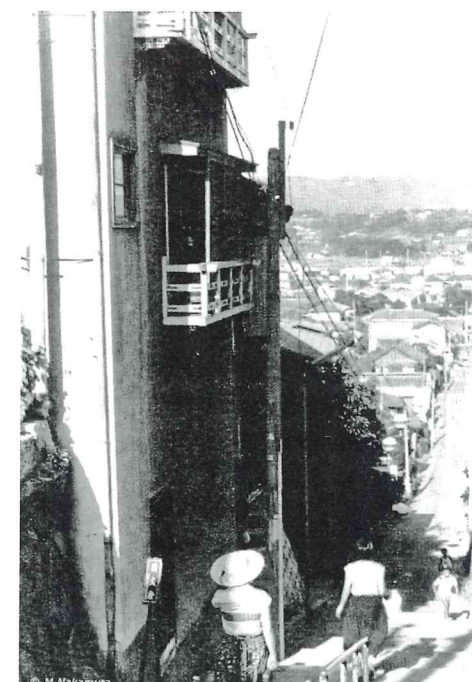


写真-14 昭和50年代の板谷坂 出典：4)



写真-15 現在の板谷坂



これら「七坂」の他の番外の坂も、図-13常陸太田市街地案内図に示しています。「真淵坂」と「観音坂②」以外は徒歩でしか通れなく、「根道」や「路地」に相当します。伝説の道となっている坂もあります。南から、「竹下坂」、「観音坂①」、「めひこ坂」、「乞食坂」、「真淵坂」、「観音坂②」、「忍者坂（乱波坂）」等があります。

**(8) 竹下坂（たけしたざか）**

「木崎坂」の途中から西側へ下りて行く狭い急な道です。剥がれて読めなくなった看板があります。途中から太田鯨が丘の西側崖中段の根道（「滝の井」があります）に繋がります。



写真-16 現在の竹下坂



写真-17 竹下坂の中程

**(9) 観音坂①（かんのんざか①）**

木崎坂を上り切って、小林家具店、きくち薬品商会の横に入り、変電所の脇を回って下りて行く小径が「観音坂①」です。江戸時代末期に坂上の梅照院境内に十一面観音様があり、坂を利用する住民により呼ばれるようになったそうです。



写真-18 観音坂① 出典：6)



写真-19 現在の観音坂①

**(10) めひこ坂（めひこざか）**

「鯨が丘トンネル」の北側に沿って下りて行く小径が「めひこ坂」です。文字が剥がれかかった看板があります。「おた坂物語」にも載っていない坂です。



写真-20 現在のめひこ坂看板



写真-21 めひこ坂の全景（トンネル右側の白い柵内）

**(11) 乞食坂（こじきざか）**

凄い名前の坂ですね。崖付近は、細く曲がりくねった急な坂です。戦国時代から江戸時代の頃に、奥の崖の岩穴に住んでいた人たちがいたと言われています。岩穴は埋められているそうです。以前の写真と比べて、現在は正面の家がなくなりました。坂の中腹に常陸太田市保育所跡やお地藏様があります。



写真-22 乞食坂 出典：6)



写真-23 現在の乞食坂



写真-24 左写真丸内のお地藏様

**(12) 真淵坂（まぶちざか）**

角の超有名うどん屋の「いづみや」さんから東に向かって下りて行く坂道で、徳川初期から何度も拡幅されてきた道です。坂の途中から北へ水戸徳川家代々の墓地「瑞竜山」への道が続きます。

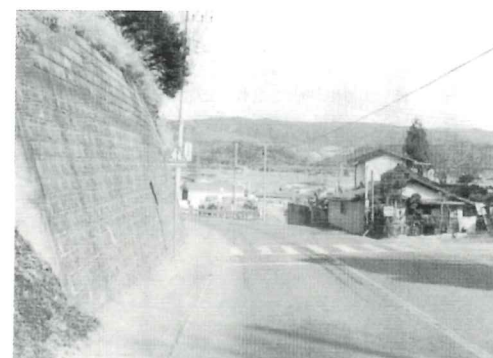


写真-25 真淵坂 出典：6)



写真-26 現在の真淵坂から瑞竜山への道



### (13) 観音坂② (かんのんざか②)

観音坂がもう一つあります。太田の町の一番北に位置する坂です。この坂の北側区域は真淵城（馬場城ともいわれた）で、この道が旧棚倉街道で、北方との交通路として古くから栄えた道です。黄門様も通られたと言われています。



写真-27 観音坂② 出典：6)



写真-28 現在の観音坂

### (14) 忍者坂 (乱波坂) (にんじゃざか、らっぱざか)

太田一高のあるあたりが、佐竹氏の「北郭」であったことから、佐竹氏にも忍者（乱波、ラッパ）が存在したことの証拠がこの坂の名称の起こりかもしれません。一昔前は旧制太田中学校の生徒が学校の行き帰りに、付近の人々も近道として利用していたそうです。

忍者なんて歴史のロマンです。坂の途中に湧水があるそうです。



写真-29 忍者坂 出典：6)

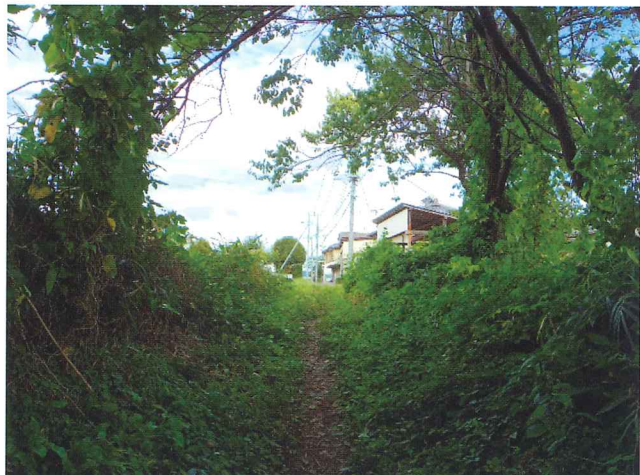


写真-30 現在の忍者坂

### 3.2 太田七井 (おおたしちせい、なない)

鯨が丘の台地上の市街地は、馬の背のような高台なので飲料水が不足がちでした。段丘の崖からは地表に浸透した地下水が湧水となって流れ出てきます。「太田七井」と呼ばれる湧水が付近の民家一帯を潤しておりました。

私の宅地内にもつい最近まで湧水口があり、水が滔々と流れておりました。その一部が井戸や池に通じておりましたが、池の場所に市道が通ったため、井戸水はその下を横断し庭木の遣り水として現在も利用しております。

鯨が丘では、特に有名な井戸「猿の井」、「金が井」、「十王井」、「下井」、「滝の井」、「紫岸井」、「観蔵井（お茶の水）」を「太田七井（おおたしちせい）」と呼んでいます。

#### (1) 猿の井 (さるのい)

案内書には内堀町の古刀比羅神社境内にありますが、確認出来ませんでした。台地の上ですから深井戸だったのではないかと推測されます。

#### (2) 金が井 (かねが井)

「板谷坂」北側を下りて行く根道で、高いところにも井戸があります。中腹に「金が井」があります。「下井」と共に綺麗に整備されており、看板には「水量が豊富であったことから、養殖や市内の醸造元に利用されていたと言われている他、お茶や生活用水等として近隣住民に利用されていました。」と、記述されています。現在も湧いています。



写真-31 金が井の全景



写真-32 金が井の湧水

#### (3) 十王井 (じゅうおうい)

「十王井」は、寿町の根道内にある井戸と思われます。今は駐車場敷地内でコンクリート蓋の下ですが、昭和40年くらいまでは太田女学校（現太田二高）に送水していたそうです。



写真-33 十王井への根道

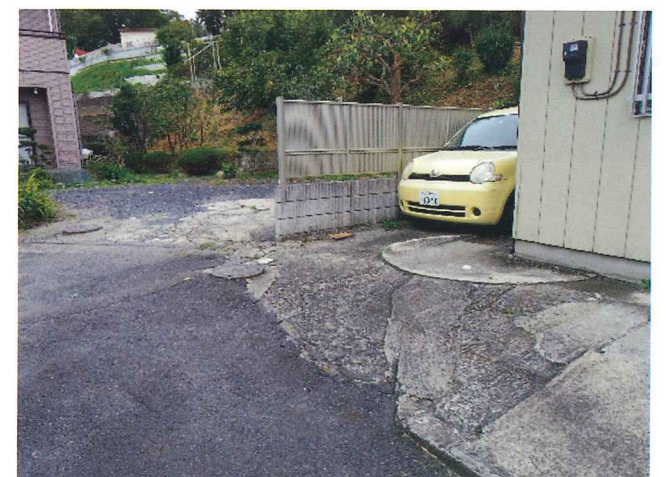


写真-34 現在の十王井（自動車左前の丸蓋）



#### (4) 下井 (しもい)

木崎一町、「下井戸坂」途中の水神宮様のところ。子供の頃は脇を通ると水の流れる音がしていました。それほど水量が豊富だったのでしょう。直ぐ下の家にも井戸があり、手動ポンプが残っております。



写真-35 現在の下井



写真-36 残っている手動ポンプ

#### (5) 滝の井 (たきのい)

木崎二町の竹下坂を下りて、中腹を横に走る根道に滝の井があります。水が溜まっていた。

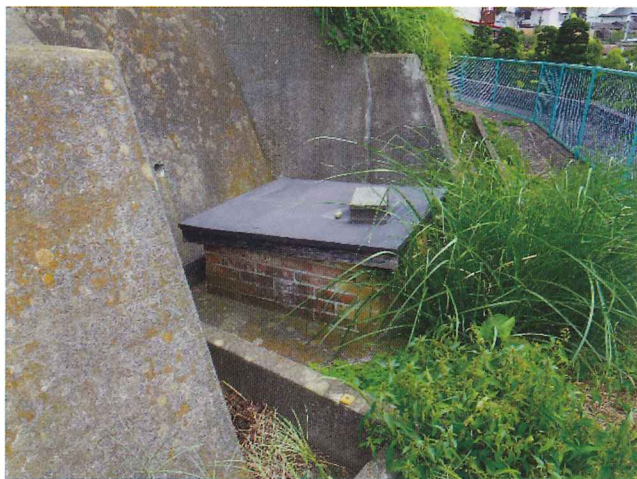


写真-37 現在の滝の井



写真-38 根道脇に見える滝の井

#### (6) 紫岸井 (?)

栄町にあったと言われていますが、詳細不明。

#### (7) 観蔵井 (かんぞうい)、御茶の水 (おちゃのみず) とも

栄町、水戸八景の一つ太田落雁の下にあります。水戸徳川家歴代藩主が太田御殿に来た時は、屋敷外のこの観蔵井 (かんぞうい) から水を汲んで使ったことから「お茶の水」とも呼ばれたそうです。水は溜まっていたが、樋から流れてはいませんでした。

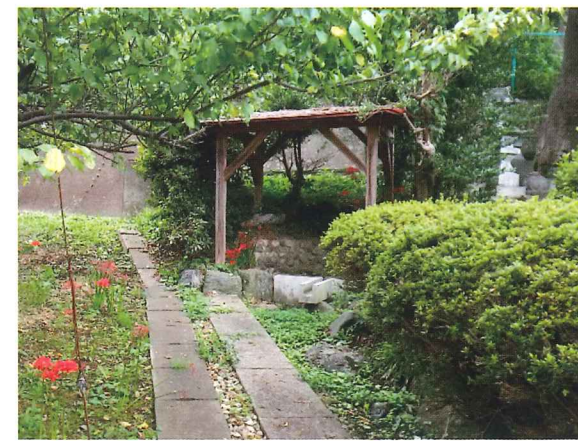


写真-39 お茶の水の全景



写真-40 お茶の水の湛水井

この他にも現在でもあちこちに使用中の井戸や丸いコンクリート蓋のされた井戸が残っております。特に根道に多いです。これらをすべてではありませんが確認できた箇所を番号なしの水色点で図示しております。今後さらに調査したいと思います。

#### 4. おわりに

以上で太田の旧市街地をざっと一回りしました。1日歩けば十分に堪能できます。興味を持たれたら、ぜひ太田の街を歩いてみてください。常陸太田市は歴史が古く、佐竹氏・徳川氏・の遺構も多く、市街地内にも明治以降のお店等が残っていて、タイムスリップしたような景観となっております。毎年3月には雛祭りに合わせて、各家で保存されてきた古い雛飾りから新しいものまで展示されます。市街地内の歴史的な街並みの他に西山荘、久昌寺、水戸徳川家歴代の墓、佐竹寺、助さんの墓のある正宗寺 (しょうじゅうじ) 等見所がたくさんあります。またの機会にご紹介します。このように狭い範囲に沢山の資源を有する常陸太田の街を、街づくりや観光政策に生かしていけたらと思っております。

最近のテレビ情報をご紹介します。平成29年9月1日から、「かんぼ生命のCM2017」で、高畑充希さんが、常陸太田の鯨が丘を駆け抜けるコマーシャル映像が流れています。「人生は夢だらけ・もしも あのと編」ということで、自転車で郵便局前を走り抜け、十王坂を乗って下り、トランペット屋 (大高洋品店) 前で自転車を止め、子供たちと板谷坂を上り、鯨が丘ふれあい広場でラジオ体操をしていました。十王坂の下り自転車は上の方からだったら絶対にできません。怖い勾配です。本書が刊行された時には、放映 (出典: 7)) が終了しているかもしれません。

最後の写真は、私が見た佐竹地区峰山の遠景です。鯨に似ていませんか？



写真-41 「鯨が丘ふれあい広場」に掲げられた看板



写真-42 最近の峰山の遠景



## 引用した情報・写真等の出典一覧

- 1) 常陸太田市史 通史上、昭和59年3月31日発行、常陸太田市史編さん委員会編、常陸太田市役所発行
- 2) 治水地形分類図、国土交通省国土地理院 治水地形分類図（初期整備版）から引用、作図
- 3) いばらきデジタルマップ（茨城県と県内市町村が共同で整備運営するインターネットで公開する地理情報システム）
- 4) 鯨が丘ウォーキングマップ（改訂版）、平成29年5月、常陸太田市鯨が丘商店会、常陸太田市商工会発行
- 5) 記念誌「ふるさと 佐竹」、昭和51年11月、佐竹記念誌編集委員会 発行
- 6) 「おおた坂物語」 坂めぐりガイド、平成6年3月、まいづる塾 発行
- 7) WWW.yumedarake.jp/ かんぼ生命TV コマーシャル映像

## 略 歴：岡崎 克美

1952年 茨城県常陸太田市生まれ

1975年 東京教育大学理学部（現筑波大学）卒業

1975年 日本テトラポッド株式会社（現（株）不動テトラ）入社

この間に 株式会社エコー、

（財）リバーフロント整備センター（現 公益財団法人リバーフロント研究所）出向

2004年 中央技術株式会社入社 現在 技術顧問

## 資 格：技術士（建設部門、河川、砂防及び海岸・海洋）

RCCM（同部門）

測量士、一級土木施工管理技士、一級造園施工管理技士 等